

千載一遇・小池榮一教授の人間性

岡本 俊之

I. 小池先生との出会い

思えば、私が神奈川大学 9 号館 5 階にある小池研究室に出入りするようになってから、早や 1 年 8 ヶ月が過ぎようとしている。それは、私が入学してからの学生生活とほぼ同じ年月になる。

初めて小池先生にお会いしたのは、昨年春入学して間もないころ、先輩と一緒にこの研究室を訪れたときのことである。地方から横浜にやってきたばかりの私が、初めて大学の研究室に足を踏み入れたのがこのときである。その時以来現在に至るまで、ずっとこの研究室に出入りしている。

小池研究室通いはその後も絶えることなく続き、2004 年現在で間もなく 33 年が過ぎようとしている。

II. 教授との人間的な触れ合い

大学に入学してから今日に至るまで、小池先生との人間的な触れ合いによって、私はさまざまなことを教えられ、また学んできた。私が大学生活で求めていたもの、それは学問のみならず同時に自分自身の人間性を高め、人格を形成していくことであるが、そのためには教授との対話の場が必要不可欠であった。私がこの研究室へよく出入りするようになったのは師のお人柄に惹かれたからに外ならないが、とりもなおさずその機会を私に与えて下さったのが小池先生なのである。私の学生生活はこの研究室を通

じて成り立っているのであり、そこでの教授との触れ合いにより人間性が養われてきたといっても決して過言ではない。

小池先生との人間的な触れ合いは 2004 年を迎えた現在なお継続しており、自身の人間性が一層培われてきたことを確信する。

III. 十年のあゆみ

「小池先生の博学多才、炎のような信念と教育に対するひたむきな姿勢に深く敬服していた。」とは、当時の三宝学長の創立十周年記念誌に寄せたお祝いの言葉の一節である。まさに、これは小池先生を形容する言葉として実に適切なものであると言える。

六池会会長在任時、同誌で小池先生も窮する人間 KOIKE の徹底分析を試みた。ゼミ生に関する記憶力抜群のコンピューター頭脳、細かさでは文句なしの電子顕微鏡的頭脳から始まり、ゼミ生の心を全て見通す千里眼へと続く。さらに、「どうもどうも」は十八番の言葉、話題にかけてはエンドレス、口うるさいのは群馬の特質といった具合である。義理と人情の固まり、ハートはゼミ生への情熱で満タン、短気は元気がモットーの人間であると分析した²⁾。

現役 10 年どころか 30 年に至ってもバイタリティや低姿勢、厳しさ、喧嘩っ早さ、決断力などゼミ創設期と少しも変わらぬ若さを維持し続けている。

IV. 十年また十年

小池先生の兄修照（みちてる）氏が語る弟像には、なるほどと思わせる言葉がある。「榮一は小柄ながら、がっちりした体つきで、長距離走が得意だと聞いていた。子供のころの父に似て、いたずらも人並みにやっていたらしい。成績も常にトップクラスだった³⁾。」

その天性の実力は、不断の努力が加わることによって将来へと着実に受け継がれていく。小池先生が在外研究等で行かれたインディアナ大学やアストン大学を訪問し、そこでのご活躍を具さに拝見することができたが、英語を自在に操り何ら変わる事のない先生の姿を見てその凄さを痛感した。さらにグレイハウンドバスでの全米横断旅行に際しては、日々驚愕の連続であった。

もちろん本来の教育工学においても忘れてはならないものがある。小池先生が東京教育工学研究会の会長をされたときには、4年間に互り事務局長をさせて頂き、研究者の中にあっても常と変わらず終始堂々とされている姿勢に感銘を受けた。また、神奈川大学情報教育研究会では5年間共同研究を行い、ゼミⅠ・Ⅱに続くゼミナールを受けることができた。書くことは人を確かにするゼミ精神で、厳しいご指導を受け本論集第16～19号に原稿を掲載して頂いた。

さらに、ご指導はご自宅が目黒から茅ヶ崎に移っても変わることなく続き、ゼミの母ともいえる圭子先生にはお世話の掛け通しである。さらにニューヨークではご子息の穰（ゆたか）ご夫妻にもご助力を頂くなど、我が家族までも大いにお力添えを頂いている。こうして小池先生との得がたい絆を大切にしつつ、それを通して筆舌に尽くせないほどのものを与え続けて頂いてきた。

IV. 而立・有終と濫觴

而立までの道程は長く、横浜に来てからの我

が人生そのものである。1971年の小池先生との出会い、そしてその翌年の小池ゼミ誕生以来ずっと今日まで続いている。

有終の美を飾れたかどうかは30周年を迎え、すでに明白であろう。小池先生の弱冠38歳からの30年後を見据えた壮大なゼミナール計画は、ここに無事に完遂したと言える。神奈川大学始まって以来の素晴らしい偉業である。ゼミに加えてもらったことに心より感謝したい。

濫觴はいよいよこれからである。試されるときが来た。今までとは違う。956や17-328はない。しかし、今まで以上に生き甲斐にしていきたいと思っている⁴⁾。

33年間に互り教育・研究に従事され、神奈川大学かつ小池ゼミナールの振興充実に献身された功績は偉大そのものである。しかし、神奈川大学に定年はあっても小池ゼミナール六池会に終わりはない。小池先生からは、終生ご指導を受け続けていきたいと願っている。

引用及び参考文献

- 1) 岡本俊之「自主の窓—教育工学と私—」『小池榮一ゼミナール機関誌・波紋』創刊号, 1973, p.20.
- 2) 小池榮一ゼミナール創立十周年記念事業実行委員会編『十年のあゆみ』1982, p.2, 27, 28.
- 3) 小池修照（元東京学園高等学校校長）『激動の昭和を生きて』（武蔵野文学舎）2002, p.122.
- 4) 岡本俊之「日ニ新タニ日ニ新タニ」『小池榮一ゼミナール創立三十周年記念誌・じゅら』2003, p.118.